

区画墓の時空

岩松 保

1. はじめに

方形周溝墓は、古墳に先立つ墓制として理解されている。1970年代までは、周溝墓は弥生首長および有力家父長層の墓と考えられていたが、その後の発掘調査例の増加により、弥生集落に普遍的に作られた墓として、集落の一般成員が葬られた墓と理解されるようになってきている。そして、そういった“均質的”な墓制から、古墳といった地域首長の墓がどのように析出されてくるか、といった点に周溝墓研究の一視点が向けられており、成果が収められている(都出1986、大庭1999)。筆者も弥生時代の方形周溝墓を中心とした墓域の構造を考察し、弥生社会の中で、集団関係がどのように変化し、首長層が析出されるのかを検討した(岩松1992)。

ところが、出現期の区画墓の調査例が増加し、墓域構造が分かる例が増加してくると、実態はそう単純ではなさそうである。尼崎市東武庫遺跡や長浜市塚町遺跡では、大形の周溝墓と小形の周溝墓が群在している。そのため、出現期の同質的な家族が、弥生社会の発展の中で階級・階層的に析出され、その上位の家族が「家族成員の数に見合った大きさ」の周溝墓を計画的に占地したとは言えない状況である。区画墓の出現期において、“すでに階層的にかなり分化していた”か、その大きさにはさほど意味のない“墓制”であったか、である。

この小論では、周溝墓の階層性については言及せず、区画墓の出現と成立に関わる意味について検討したい。筆者はかつて、弥生時代における近畿中央部と北部の区画墓が立地を違えて造営されている事実から、それぞれの地域において、他界観＝世界観が違っていたと解釈した(岩松1996)。この論考ではその考えを一步進め、区画墓成立の意味とそれに伴う時空認識の変容に関して、その見通しを探るものである。

2. 周溝墓の性格

(1) 区画の意味

墓とは、死者の肉体を葬る場所である。しかし、人間における墓は単に死体を埋めると

いう内容を越えて、その人間の死を迎えた社会が、その人間の死と共に生じた間隙を取り繕い、新たな社会と社会関係を再構築する場でもある。そのため、葬送の主体はそれを執り行う集団であり、一見、その主体と思える死者自体は、実は葬送儀礼のための資源と考えられる。墓には、現世に取り残された人間達が死者の死に際してどのような意味を与えたのか、という戦略が記録されているのである。

区画墓は、溝を四周に巡らせて、空間的にある範囲を区画した墓である。世界を分節し、分類するための一つの手段が区画である。自然にあっては、連続して切れ目のないところに、恣意的に切れ目を入れて人工的な分断を行うことにより、何らかの意味を生み出すのである。平明な空間が溝の掘削によって分節されるやいなや、意味と実態が発生する。うち／そとの構造化である。この空間に対する二項対立的な分節が社会集団に対照されると、社会集団内にも二項対立的な分節がなされる。そのため、切り取られた一つの空間に埋葬された人々は、その空間に埋葬されているという点で、そうでない人々と対照して、何らかの特別な関係が表象されていると判断される。このような関係性は、時間・空間の推移とともに変容し、社会に共有される意味もまた変わっていくのである。

(2) 区画墓の結合原理

筆者は、かつて、墓および墓域を埋葬墓—単位墓—単位墓群というように分類した(岩松1992)。埋葬墓を土壇や石棺など、実際に死者を埋葬するのに必要最小限の施設とし、それらが一定の範囲に有機的に群集しているもの、例えば古墳や周溝墓などを単位墓とし、単位墓が相互に関連を持って群集している総体を単位墓群と考えた。このように分類すると、周溝墓を記号論的に捉えることが可能で、単位墓や単位墓群を形成するその社会的な紐帯の性格が、地域や時代、そして単位墓の形態によって、どのように異なっているのか、どのように変容していくのか、を問題化し易くなる。そして単位墓レベルと同じく、単位墓群レベルで想定される結合紐帯の相違・変容を跡づけることも、それぞれの社会を理解する上で重要となるのである。

弥生時代の埋葬墓間の結合紐帯を具体的に検討したものに、溝口孝司の論文がある。溝口は、福岡県甘木市栗山遺跡の墓域の検討から、被葬者の配置には特別な意味を有していたとし、埋葬行為を「社会的戦略・行為の物象化の結果」と理解し、埋葬される特定個人とすでに埋葬されている特定個人との関係が象徴的に表示されていると考えた(溝口1995)。そして、土器型式の比較から両者は生前に直接の関係を持たなかったため、特定の祖霊とその生前の事跡とを被葬者と結びつけることが意図されたと考えた。埋葬墓の結合原理を血縁関係に限らない点で斬新である。田中良之らは、古墳出土人骨の歯冠計測値の比較より、親族構成を推定しており(田中1990)、5世紀中葉までは兄妹・姉弟を中心としたキョ

ウダイ原理、6世紀前半までは家長とその子が墳墓に葬られており、6世紀前半から中葉にいたって家長の妻がそこに葬られるようになったとまとめている。

これらの論文と違って、周溝墓の被葬者間の関係は、直接的にそうと論じられたものではない。周溝墓は従来、区画内の埋葬者数の多さ、男性と女性の性差がないこと、小児から大人までのさまざまな年齢の被葬者が見られる点から、血縁をその結合原理とする家族を単位とした墓と考えられている(田代1982、都出1989)。区画墓上の埋葬墓の配置に着目すると、それぞれがさほど重複していないので、埋葬墓をその都度ランダムに作っていったのではなく、それ以前になされた埋葬墓の位置を十分に認知した上で、それらを避けて埋葬しようとする意図が働いていたと判断される。どの位置に埋葬がなされたかという記憶が忘れ去られない程度の時間幅の中で、埋葬が繰り返されたのである。こういった埋葬墓の埋葬位置に関わる記憶は、世代を越えて長期間にわたって口承で伝えられたというよりも、同一の集団が同一の単位墓上に埋葬墓を継時的に作っていったものと考えられまいか。もしそうならば、一つの単位墓内の埋葬墓は、同一の集団が比較的短い期間の中で埋葬を行ったものと考えられ、先述の、従来そうと考えられている根拠——埋葬者数の多さと小児や様々な年齢の男女が埋葬されていることに加えて、単位墓としての区画墓は、血縁家族をその結合原理とする墓であったとする根拠の一つに加え、以下の論を進めたい。

3. 弥生時代における区画墓造営の原理

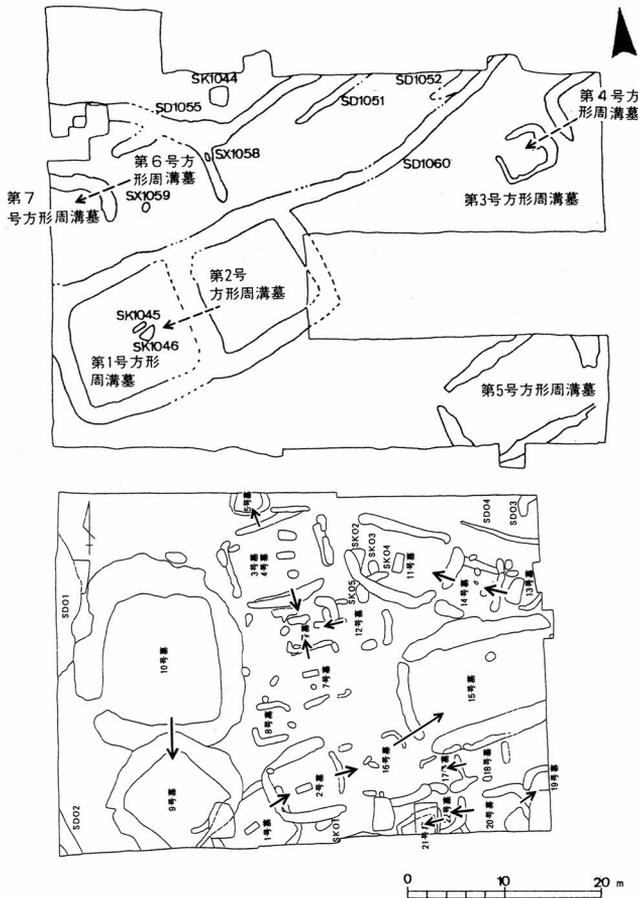
(1) 単位墓群の構造

① 列状の単位墓群

周溝墓をはじめとする弥生時代の区画墓は、先述のように家族を単位とした単位墓であるとする、単位墓である区画墓が溝を共有したり、接したり、方位を揃えて“有機的な関連を有して”構築されている一群を単位墓群と捉えたい。こういった単位墓群は、単位墓が時間的に継起して造営されたものと判断される。これは以下の考えを根拠にしている。

弥生集落の墓域を広範囲に調査しても、大きく重なって別個の周溝墓が造られている例はあまりない。このような区画墓の上に新たな区画墓を大きく重ねて造らないという事実は、既存の区画墓の溝が実際に見えていたということ、その時点で既存の区画墓が墓として利用されているがいまいが、隣接して新たな区画墓を造ろうとしている集団はそれを墓として認識していたということ、そしてそれゆえに大きく重複させて新たな区画墓を造ってはいけないと意識していたことを示している。すなわち、墓と認識した上で、その溝の一部を重ねて新たな周溝墓を作っているのである。

そうすると、溝を共有したり再掘削して連なっている周溝墓群は、偶然にそうとなった



第1図 単位墓群例1

上段；長岡京市神足遺跡・下段；尼崎市東武庫遺跡(1/800)
山本他(1980)・山田他(1995)に加筆・転載

のではなく、既存の周溝が眼前に見えるがゆえに、意図的にそうしたと考えられる。そのため、そうでない周溝墓と較べて、何らかの関連性を表示するために、既存の区画溝と共有・再掘削が行われたと考えられる。区画墓が血縁家族という分節単位を表しているとするれば、ある区画墓に接続・共有している区画墓は、それに近い関係——共時的な血族もしくは通時的な血族と判断される。

長岡京市神足遺跡(山本他1980)、尼崎市東武庫遺跡(山田他1995)では、方位を揃え列状に連なる周溝墓群が何列も見取れる(第1図)。切り合い関係や土器の先後関係から、矢印方向に周溝墓が作られていったと復原できる。近しい血縁関係を有した集団が列状に単位墓を共時的に作るのならば、1点から放射状に展開すると期待されるが、実際にはそ

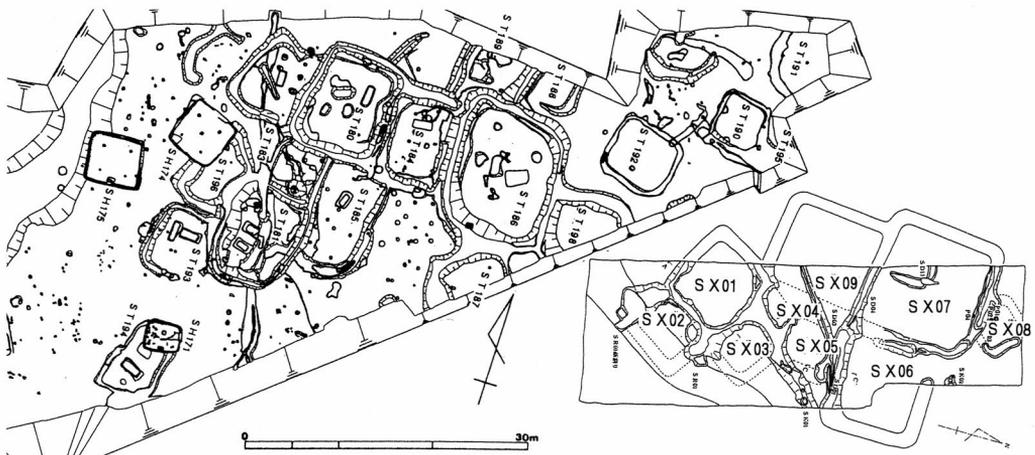
うではない。そのため、それぞれの列が通時的な血族と想定する蓋然性が高いと思われる。このように、溝を共有して、方位を揃え、列状に並ぶものを単位墓群と考えたい。

②非列状の単位墓群

非列状を呈した、単位墓群と判断される周溝墓群がある(第2図)。

長浜市塚町遺跡では、10基の周溝墓が調査されており、前期末の方形周溝墓8基、中期の周溝墓2基が検出されている(丸山1994)。詳細は不明であるが、前期の周溝墓は、SX01~04とSX05・07・09の二群に分かれ、それぞれを単位墓群と判断したい。異なった単位墓群間であっても、周溝を共有もしくは重複するものである。

大山崎町下植野南遺跡では、中期前半の周溝墓が調査されており、周溝を共有して連結するもの(周溝墓群1)と連結しないもの(周溝墓群2)が分布し、「周溝墓群1と周溝墓群2



第2図 単位墓群例2

上段；大山崎町下植野南遺跡・下段；長浜市塚町遺跡(1/800)
竹下他(1991)・丸山(1994)に加筆・転載

の違いは、時間差の違いを示すものではなく、それぞれの被葬者の社会的な身分・地位の違いなどを示すものではないか」と報告されている(竹下他1999)。詳細は遺物の型式の前後関係や遺構の重複関係を基に検討せねばならないが、遺構図を子細に見ると、周溝墓群1・周溝墓群2は、それぞれがさらに数群に分かれるように見て取れる。

こういった単位墓群は、それぞれが、一つの家族が累世的に区画墓を作り続けた結果と考えられる。そして、列状・塊状の単位墓群を単位として墓域が形成されている。墓域は、一定期間にわたって墓としてだけに利用されているので、過去における墓もある短期間の時間が経過すれば忘れ去られるものではなくて、単位墓群の一つとして新たな単位墓を造り足していく間を通じて、墓として認識されていたことは間違いなからう。

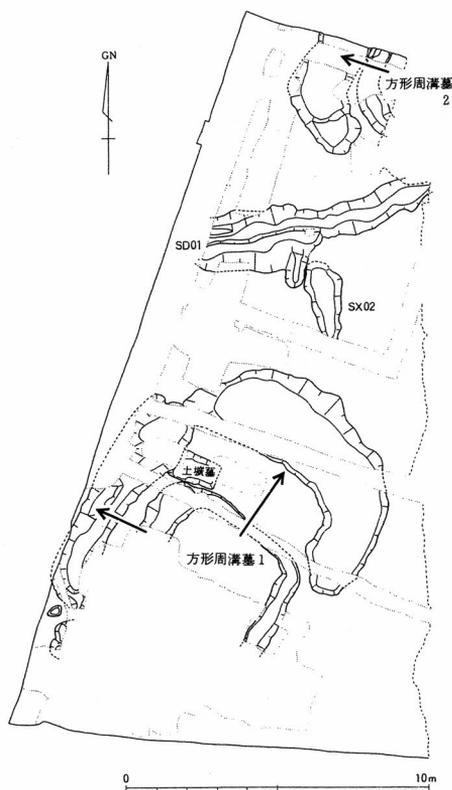
以上のように考えると、ある家族が順次築造していった単位墓群は、ある家系の歴史を示すものとして認識されており、それゆえに、墓としてだけに利用され続けたのであろう。

(2)多様な周溝墓

上述のように、溝を共有したり重複して増設された区画墓が、ある一定の群集を示すことの背後には、その家族の家系が認識されており、群の最後尾は自らが葬られるべき場所として決められていた、と理解した場合、多様な周溝墓——報告例が少なく、周溝墓制から見るとややイレギュラーとも思えるような例を解釈できる。

①拡張する周溝墓

列状に周溝墓が連なる中で、一旦作られた周溝墓が、その使用に際して、平面的に拡張される例がある。大阪市桑津遺跡では、中期前半の周溝墓群が調査されている。KW93-2次調査では、方形周溝墓1・2ともに、周溝墓の外側に新たな周溝を掘削し、矢印方向



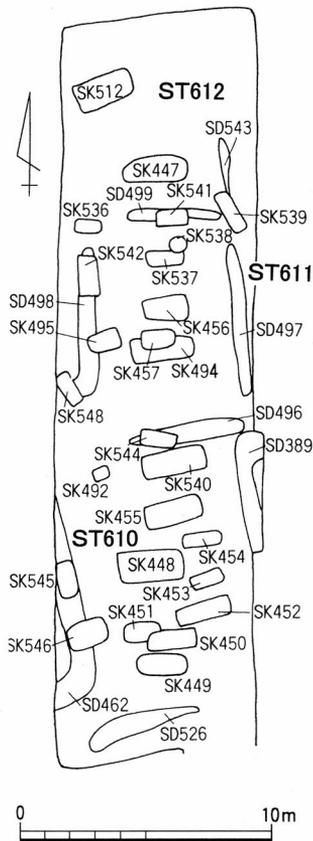
第3図 平面的に拡張する周溝墓
 大阪市桑津遺跡(1/250)
 久保他(1988)に加筆転載

に方台部を拡張したと報告されている(第3図; 久保他1998)。このような、周溝墓の外側に新たに溝を掘削して方台部を拡張している例には、茨木市東奈良遺跡F-4-N-5・8・9地区第1号方形周溝墓(井上他1979)、大阪市平野区加美遺跡がある(大庭他1997)。従前にあった周溝墓を拡張するような状況が生じたのであろう。これは、制度としての周溝墓が新たな局面——血縁関係をいっそう重視する社会に直面したために、新たな周溝墓を別個に造るのではなくて、方台部を拡張してまでも同一の区画墓に葬られるべきニーズが増したのであろう。その時点では、そういったニーズに応えるべき新たな周溝墓の論理=制度が作り出されていなかったと言えよう。

②墳丘を盛り上げる周溝墓

巨摩遺跡の2号周溝墓にあっては、総数15基の埋葬墓が調査されているが、墳丘の一部が調査範囲外にあるため、その総数は20基を優に超えるものと思われる(玉井他1981)。この周溝墓では、3層にわたって埋葬が行われている。一次埋葬は2体、約90cmの盛り土を行った後に二次埋葬として11体を埋葬し、その後約25cmの盛り土を行って、2体を埋葬している。これらの盛り土がどの段階でなされたか、上位の埋葬がなされる段階なのか、ある面の全ての埋葬が完了した段階なのか、については、明瞭な言及はなされていない。墳丘の盛り土について、加美遺跡のY1号墓で、興味深い事実が確認されている。田中は加美遺跡のY1号墓に関して、「それで23基の埋葬が終わった段階で、どうやらその上面をきれいにならして、平均厚いところで15cmくらいあるんですけども、だいたい10cm程度ひきならして墳頂部を整えています。それ以降は一切埋葬は行ってないということが今回の調査で明らかになっています」(田中他1986)と報告している。この例から推定すると、巨摩遺跡2号周溝墓も、それぞれの面における埋葬が完了した段階で、その上に盛り土を行っているものと判断される。これら上位へと埋葬を繰り返していく例をみると、これらはすべて弥生時代後期の早い時期になされており、比較的短期間になされたものと思われる。

第1表 池上遺跡周溝墓検出土壌規模一覧(単位m)
中川他(2000)より作成



第4図 立体的に拡張する周溝墓
八木町池上遺跡(1/300)
中川他(2000)に加筆・転載

周溝墓	遺構No.	長さ	幅	深さ
S T 611	S K 457	1.3	0.65	0.05
S T 610	S K 453	1.3	0.7	0.1
S T 610	S K 454	1.6	0.7	0.1
S T 611	S K 456	1.8	1.0	0.1
S T 611	S K 548	1.4	0.6	0.2
S T 611	S K 536	1.05	0.5	0.2
S T 612	S K 512	2.4	1.0	0.25
S T 610	S K 450	2.1	0.8	0.3
S T 610	S K 455	2.3	1.0	0.3
S T 610	S K 544	1.6	0.7~0.8	0.3
S T 612	S K 447	2.25	1.1	0.3
S T 611	S K 539	1.85	0.65	0.35
S T 610	S K 449	1.8	0.7~0.9	0.4
S T 611	S K 494	2.5	0.9	0.4
S T 610	S K 540	2.4	0.8~1.0	0.45
S T 611	S K 495	1.45	0.8	0.45
S T 610	S K 452	1.9	0.8	0.5
S T 610	S K 448	2.6	1.2~1.4	0.8
S T 610	S K 451	1.5	0.9	0.8
S T 610	S K 546	1.6	0.8~1.0	0.9

京都府船井郡八木町池上遺跡第5次調査で検出された周溝墓を検討したい(中川他2000)。第4図は、第7トレンチで検出した周溝墓の平面図で、第1表は主体部の規模を報告文より集成したものである。主体部の深さに着目すると、S T 612は、0.25 mと0.3 mの2基を検出しており、ほぼ同じ深さに掘削されている。S T 610では、0.1 m~0.9 mまで様々であるが、おおむね、0.1 m未満、0.3 m~0.5 m、0.8~0.9 mの三大別できる。S T 611は、0.2 m未満と0.4 m前後の二大別が可能であろう。この分類に異論もあろうが、これらの周溝墓上の墓壇の深さは、数タイプに分類できることを確認しておきたい。S K 456は木棺痕跡が認められるが、深さは0.1 mしか残っておらず、とてい、木棺を納めることは不可能である。そのため、周溝墓の台状部が後世に削平を受けたと考える必要がある。人を埋葬するためには、一定の深さ——例えば、ここで見つかった最深の0.8 m~0.9 m——が必要であるとすれば、検出した深さにより分類した数タイプは、その差分が削平されたこととなる。すなわち、それぞれの群が掘り込まれた高さが異なっていることとなり、それに応じた回数 of 盛り土がなされていたと推測される。重複する墓壇は二組が確認されているが、S T 610では、S K 451(深さ0.8 m)→S K 450(同

0.3 m)、S T 611では、S K 494(同0.4 m)→S K 457(同0.05 m)と、後出する土層が浅いことが、この推定を裏打ちする。

こういった盛り土を行う行為は、その周溝墓に“埋葬されるべき”対象者が、先にみたように、方台部を同一の平面上で“拡張”して埋葬されたのではなく、同一の方台部に盛り土を行って、立体的に“拡張”したものと言えよう。とは言っても、加美遺跡Y1号墓で確認されているように、上位の埋葬が執り行われる直前に盛り土を行うのではなく、その面の埋葬が全て完了した直後に盛り土を行っているので、その時点で一旦、その周溝墓に葬られるべき予定人員の埋葬は完了しているのである。溝の共有という二次的な親和性・関係性の主張ではなく、あくまでも、同一の区画墓に埋葬されるという直接的な関係性が主張されているということが読みとれるのである。

③中心に埋葬が無い周溝墓

巨摩遺跡2号周溝墓の二次埋葬の場合、その中心的な埋葬墓と判断されるのは、3号埋葬墓である。ところが、この埋葬墓は遺構の重複関係から、11～13号埋葬墓に後出するものである。これらの埋葬墓には木棺が残存しており、その大きさから成人用とは考えにくく、小児を埋葬したものと判断される。ここでは、中心的な埋葬墓に先だって小児の埋葬がなされているのである。

とすると、必ずしも、中心的な個人の死を迎えて後に、その周辺の埋葬がなされたのではないのである。そこには、ある特定の周溝墓に葬られるべき個人は、生前の関係によって予め決定されていた——この小論の内容からすると、その中心的な被葬者と血縁関係を有した家族の成員であることが、その周溝墓に葬られるべき資格であったのであろう。周溝墓の造営契機は、その中心的な人物の死をもってなされる必然性はないのである。

山賀遺跡(その3)では、中期前葉時点で、小児の埋葬墓が単独で中心に埋葬された周溝墓が検出されている(西口他1984)。この例は、周溝墓に葬られるべき家族の一員であるがゆえに、小児であっても単独で周溝墓に埋葬されたと言えよう。この集落では、多人数埋葬をしないという点で、他の集落の周溝墓と異なっているのであろう。多人数埋葬が単独埋葬に変換されており、それゆえ、小児であっても単独で埋葬されているのである。

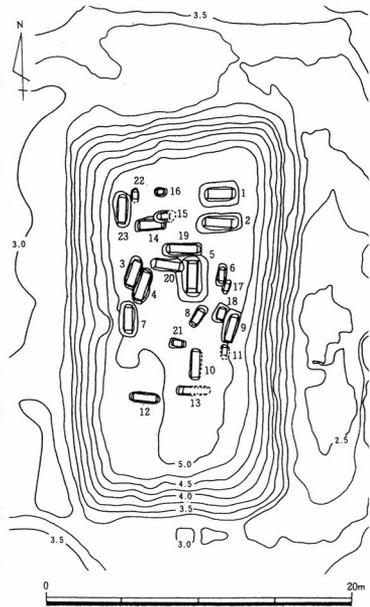
④大形の墳丘をもつ周溝墓

以上のような血縁原理の下に、より広範な血縁集団の「同一単位墓への埋葬」の実現を事前の計画段階に組み入れた場合、大形の区画墓を当初から準備することは当然の結果である。加美遺跡や瓜生堂遺跡などの大形で、多人数の埋葬墓を有する周溝墓がこれであろう。

加美遺跡Y1号墳は、墳丘の裾部で南北が約26 m、東西が約15 m、盛り土自体は約2 m

あり、墳丘の周囲には幅6mから9mの周溝が巡っている(第5図;田中他1986)。この墳丘上には23基の埋葬墓が作られていた。瓜生堂遺跡2号墓は、裾部長で14.85m×9.7mの規模を有し、木棺6・甕棺5・土壙6・壺棺1の18基の埋葬墓が調査されている(今村他1981)。

この多人数埋葬は、その個人に関わる直接的な血縁を有した家族成員が多かったからではなく、その個人・家族に関わって同一の単位墓に葬られてしかるべきと考えられていた人々が多人数であったためである。墳丘を盛り上げて重層的にしたり、平面的に増設する行為は、ある個人、もしくはある家族との関わり合いを“墓の築造時”に予想していなかったためと言え、そういった多人数にわたる関わり合いを社会的な“制度”として吸収する以前の形態と捉えられよう。多人数を埋葬した大形区画墓の出現は、多人数との関わり合いが周溝墓の制度として認められた結果として出現したものと言える。



第5図 大形の周溝墓
大阪市加美Y1号墓(1/500)
田中他(1986)に加筆・転載

⑤祖霊の場としての周溝墓

福田 聖は周溝墓の儀礼を民俗学・人類学・歴史学から復元し(福田1991)、周溝墓の溝内の異なった層位から出土した型式の異なるa・bの土器群を検討し、古相のa群(前野町式;弥生時代終末期)を被葬者の埋葬に伴って執り行われた葬送儀礼、新相のb群(五領式;古墳時代前期初頭)を共同体の守護霊に昇華させるための浄化儀礼の際に使用された土器と捉えた。

三好孝一は、巨摩遺跡11号周溝墓に中期後半に属する供献土器・土器棺に混じって、焼成後の穿孔を施した後期の土器群が検出されるのを「後期段階に至っても墓という認識のもとに土器の供献儀礼が執り行われた可能性はないのか、一步踏み込んで中期に築造された方形周溝墓に後期段階での埋葬が行われた可能性」を指摘している(三好1996)。

これらの論考で検討されているように、時期が大きく隔たった土器が、偶然でない状況下で出土している場合がある。こういった土器の出土状況は、列状/塊状に周溝墓が群集し、永く墓として認識されたと推定したと符合する。この点からも、周溝墓が荒らされるにまかされた、一時の墓ではなかったのである。単位墓群は祖霊を想い、家系を認識する場であったのである。

以上のように、ある関係性を表象した単位墓としての周溝墓が、血縁関係を表象してい

るとすると、その列状もしくは塊状の一群はその時間的な経過を空間上に展開したものである。時間 \leftrightarrow 空間を変換する場である。この点で、区画墓は時空認識の変容に関して特段の意味を有していたと考える。これについては、節を変えて見ていきたい。

4. 区画墓と時空認識

(1) 区画墓の成立の意義

縄文時代は、それ以前の移動を中心とした生活とは違って、一定程度の定住化がなされた時代である。集落成員間の社会的な緊張とその緩和、ゴミの処理——特に死者の処理とそれとのつき合いが必要となってくる(加藤・西田1986)。そのため、それまでにはなかった取り決めが必要となる。例えば、空間に関しては、墓を造れる空間と造れない空間/住居を造れる空間と造れない空間というように、利用する用途によって空間を限定するのである。言い換えると、定住した空間を“恣意的”に切り取り、それを意味づける必要が生じたのである。

このような縄文社会から、家族を空間的に表象した区画墓が弥生時代に出現し、広範に定着したために、時空認識にどのような変容がなされたのであろうか。

空間の分節は、血縁家族を単位とした分節と占有であり、それが長期間にわたって、列状・塊状に作られていく、その単位墓群自体が時間の空間的表象と考えられる。

縄文集落の墓域においても、ある一塊りの墓群の分布が見て取れる。これもまた、血縁関係にある家族を結合原理に形成されたものと考えられている(山田1995)。単位墓を形成する結合原理は弥生集落における“区画墓”と基本的に変わらないが、周溝墓や台状墓に設けられた「区画」に、根本的な違いがあると考ええる。弥生の区画墓は、空間と集落構成員にウチ/ソトの構造化を行い、血縁集団=ウチ/非血縁集団=ソトとし、血縁紐帯のさらなる結合強化を空間の“切り取り”により、表示しているのである。

(2) 時間の変化

区画墓を血縁家族という分節単位を表していると考えれば、その時間軸上での積分である単位墓群は家系を表現していると言える。そして、それは家系を認識するための装置として機能したと考えられる。

川田順造によると、無文字社会においては、時間は一定の深さで累積することがなく、そのままの深さで未来に推移していく(川田1990)。区画墓が成立し、累世的に構築されていくと、口承による観念的な家族の歴史の中で、具体的な事物としての区画墓が参照されるようになり、モニュメントとして、歴史的時間の一点を指し示すようになる。ここに至って、区画墓の列が伸びるように、歴史は、時間の経過と共に深みを増していくもの——直

線的な時間が認識されるようになったと言えまいか。

これを記憶のメカニズムのアナロジーで考えてみよう。記憶は、過去の経験・学習の内容を保持し、それを後で思い出すことであり、自分自身の過去を定位し、位置づけるために不可欠なものである。記憶には短期記憶と長期記憶があり、短期記憶は7個前後のものしか記憶できず、新しいものを記憶するためには今あるものを消去せねばならないという。長期記憶は、心理的な現在が積み重なって、一日、一年といった長いスパンにわたる時間の流れの認識である。長期記憶の形成には、脳の中の海馬という部位が関わっており、ここに損傷を受けた者は長期記憶を形成することができず、「永遠の現在」に閉じこめられた状態になってしまう。

集落・集団における短期記憶は、個々人の日常生活であり、出来事と言えよう。そういった記憶を、集落や集団全体が長く留めるべき記憶——長期記憶へと変換したものが歴史・神話であり、そのための装置がモニュメントであり、神話自体であると考え。雑多な短期記憶のうち、その集団にとって長く記憶に留める必要があると判断されたものが、モニュメントにまつわる神話・物語という装置で集団記憶＝歴史・神話へと変換されるのである。

西田正規は、「定住的な集落という場には、墓、住居跡、貝塚などが蓄積して、個々人の経験を越えた遠い過去までが刻まれる。土地は歴史の記憶装置となり、人々が生きる時間の深さと密度を増加させる。何十もの墓のある集落に住む人は、それを見るたび死者を感じ、見も知らぬ遠い祖先と自分の関係について思いをはせることになる。」(西田1989)と述べており、まさに、周溝墓の列は、過去の直系家族＝血族の歴史を眼前に示したものであり、時間・歴史を視覚化したものと言えよう。ここにはじめて、時間の経過とともに深さを増していく過去の物語が立ち現れるのである。そういった血縁を無意識的に学ぶ制度として単位墓列があり、それゆえ、血縁原理によるアイデンティティーの形成が促進されたものと考えられる。

こういった歴史に対する認識上の変化に伴って、区画墓は血縁——この場合には「家系」を認識するための装置として機能したと言えよう。周溝墓を列状に造営していくという行為、そしておそらく、祖霊をマツル行為が家系の認識を強めたと考えたい。

(3)空間の変化

区画墓の出現によって、当時の社会における空間に対する取り扱いも変化したと考えられる。現象的には、単位墓集団による空間の切り取りとその半永続的な占有である。ある空間を切り取って墓という一つの使用目的に限定し、それを一家族が排他的に、長期間にわたって占有した点である。先に見たように、単位墓列・塊を長期間にわたって墓と認識

していたことは、その単位墓集団が家系の墓として、その空間を利用(占有)するのを認められていたと言えるであろう。すなわち、集団や個人が恣意的に空間を切り取って占有しても良いという意識が芽生えていたであろう。

いわば、空間の対象化であり、道具としての客体化である。

一方、縄文集落にあっては、竪穴式住居跡に多くの重複が認められ、一定の空間をある家族が占有していたとも考えられよう。が、竪穴式住居跡は建て替えられるものであり、ある時点を具体的に参照できるものは何もない。また、ある空間の範囲に対して一家族が占有していたとしても、その占有関係は厳密には、その時々集落内の家族間で取り決められるものであろうから、そのまま時系列的に残っているような、単位墓群列ほどには固定的なものではないであろう。

(4) 集団の象徴

ロドニー・ニーダムは、「社会的象徴の機能とは、単に象徴されるものの重要性をさし示し、強めることにあるだけでなく、その社会集団で重要であると決められているものへの情緒的関与を喚起し維持することにもある」と述べている。そして、シンボリズムは、「社会的に重要なことを明確に指し示すため」と「人々が生活の支えとすべき価値を彼らすべてに認めさせるため」の二重の意味で必要であると述べている(ニーダム 1993)。

区画墓の形態やその立地に地域性があることが指摘されている(前田 1991・服部 1992)。また、区画墓の成立に関しては、最初期の区画墓が同時多発的に多様な形態を採ることから、朝鮮半島から列島に移住した渡来人集団の差が反映した可能性が指摘されている(本間 1997)。その出現について意見を述べる用意はないが、多様な地域性が区画墓に見られることについては異論がなかろう。こういった地域性については、その集団の世界観が異なっている可能性を述べたことがあるが(岩松 1996)、あるレベルにおける自/他の意識をその墓の形態で表象しているとも言えよう。

墓の形態に何らかの意味があるのならば、ある集団は、ある形態の墓を採用することで、自らの立場・思想を表明していると考えられる。集団内に向けては、その集団の関係性を統合するシンボルであり、集団外に向けては、自集団の立場である。前者については、これまでに述べてきたところであるが、後者は、あるレベルにおける集団意識=アイデンティティーとでも言えるものであろう。ある集団が、ある文化要素が表象する意味社会に属しているか、属していないか、それが発するコードを共有しているか、共有していないかである。ある集団は他集団に対して、いずれの立場にあるのかを表示しているのである。ある意味社会・観念を共有している集団群は、そうでない集団や集団群よりも、少なくとも、より親和的な関係を構築しているであろう。とは言っても、あえてコードを共有しないと

いうメッセージを発して、その異質性を親和的な関係性の中で表象する戦略もあろう。

区画墓における地域性は、大きくは区画墓を作るという規範＝意味社会の中で、“少しだけ”形態の異なる区画墓を採用することで、その意味社会の中の下位レベルにおいて自／他を表象し、その相違性とアイデンティティーを表示していると考えられるのである。

5. まとめ

Felipe Criadoによると、文化変容が生じるのは、社会と自然との間の関係が新たに理解し直されたためであり(Felipe Criado 1995)、この考えを敷衍すると、周溝墓をはじめとする区画墓が弥生時代の列島に成立したことを契機に、文化-自然の関係が新たに取交わされ、当時の人々の観念に大きな変容を与えたものと考えられる。

弥生時代以前の縄文社会にあっても、墓域が数体の埋葬墓に群別できるので、ある家族をそれ以外の成員とを区別するという構造化が存在していることは確かである。区画墓成立の重要な点は、ウチ／ソトの構造化を空間的に視覚化している点である。家族という結びつきの単位が、溝を巡らした区画墓として表示されるとともに、その家系が過去からその時点に至るまでの継続性が列・塊(単位墓群)として眼前に現出されているのである。

そのため、ある系列の周溝墓(単位墓)に葬られるべき“個人”は、その集団に属しているがゆえに、その周溝墓(単位墓)に葬られるべき存在になるのである。単位墓群を現実に見ることができるので、単位墓群は、その単位墓集団を構成している個々人に対して、血縁集団(単位墓集団)への“帰属意識”を再生産せしめる“装置”としても機能していたと言える。そして、観念の中の祖霊を墓域の中の区画墓に重ね合わせた時に、直線的に深まる時間を伴った家系の神話が創出されたのであろう。

現代社会にあっても、“万世一系の天皇”・歌舞伎・家元などの世襲、政治家・スポーツ選手・芸能界、そして会社社長などに見られる二世・三世のように、血縁・家系に対して“安心”・“信頼”といった感情が無意識的に喚起される場合がある。竹内久美子風に言うと、“家系をよとする遺伝子”が我々には備わっているのであろうか。それとも、この小論で論じたように、区画墓のような制度・装置が現代社会の中に埋め込まれ、血縁・家系に対する感情を再確認・再生産せしめているのであろうか。

(いわまつ・たもつ＝当センター調査第2課調査第3係主任調査員)

参考文献

- 井上直樹他1979 『東奈良遺跡発掘調査概報』Ⅰ 東奈良遺跡調査会
 今村道雄他1981 『瓜生堂遺跡』Ⅲ 瓜生堂遺跡調査会

- 岩松 保 1992 「墓域の中の集団構成——近畿地方の周溝墓群の分析を通じて」前編・後編(『京都府埋蔵文化財情報』第44・45号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 岩松 保 1996 「山地の墓、あるいは平地の墓」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 大庭重信他 1997 「加美遺跡の方形周溝墓」(『大阪市文化財情報 葦火(あしび)』67号 (財)大阪市文化財協会)
- 大庭重信 1999 「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」(『国家形成期の考古学——大阪大学考古学研究室10周年記念論集—— 大阪大学考古学研究室)
- 加藤晋平・西田正規 1986 『森を追われたサルたち 人類史の試み』(同成社)
- 川田順造 1990 『無文字社会の歴史』(岩波書店 同時代ライブラリー)
- 久保和士他 1998 『大阪市東住吉区桑津遺跡発掘調査報告』((財)大阪市文化財協会)
- 竹下士郎他 1999 「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 田代克己 1982 「方形周溝墓に関する一覚書」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会)
- 田中清美他 1986 『加美遺跡の検討 古代を考える』43 (古代を考える會)
- 田中良之 1990 「朝田墳墓群被葬者の親族関係」(『九州文化史研究所紀要』第35号 九州大学九州文化研究施設)
- 玉井 功他 1981 『巨摩・瓜生堂』(大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター)
- 都出比呂志 1986 「墳墓」『岩波講座日本考古学』4 (岩波書店)
- 都出比呂志 1989 「弥生時代集落の構造」(『日本農耕社会の成立過程』岩波書店)
- 中川和哉他 2000 「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)
- 西口陽一他 1984 『山賀遺跡(その3)』(大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター)
- 西田正規 1989 『縄文の生態史観 UP考古学選書』13(東京大学出版会)
- 服部信博 1992 「考察 墓制」(『山中遺跡 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第40集 (財)愛知県埋蔵文化財センター)
- Felipe Criado 1995 “The visibility of the archaeological record and the interpretation of social reality” Interpreting Archaeology ROUTLEDGE
- 福田 聖 1991 「方形周溝墓と儀礼——鍛冶谷・新田口遺跡第12方形周溝墓の死者儀礼」(『埼玉考古学論集 設立10周年記念論文集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団)
- 前田清彦 1991 「方形周溝墓平面形態考」(『古代文化』Vol.43-8 古代學協會)
- 丸山雄二 1994 『塚町遺跡VI・VII 長浜市埋蔵文化財調査資料』第8集(長浜市教育委員会)
- 三好孝一 1996 「巨摩遺跡中期方形周溝墓出土土器覚書—11号墓出土供献土器をめぐって—」(『大阪文化財研究』第10号 (財)大阪府文化財調査研究センター)
- 溝口孝司 1995 「福岡県甘木市栗山遺跡C群墓域の研究—北部九州弥生時代中期後半墓地の一例の社会考古学的検討—」(『日本考古学』第2号 日本考古学協会)
- ロドニー・ニーダム 1993 『象徴的分類』(吉田禎吾・白川琢磨訳) みすず書房
- 山田清朝他 1995 『尼崎市東武庫遺跡 兵庫県文化財調査報告』第150冊(兵庫県教育委員会)
- 山田康弘 1995 「多数合葬例の意義—縄文時代の関東地方を中心に—」(『考古学研究』第42巻2号 考古学研究会)
- 山本輝雄他 1980 「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡右京第10・28次調査(7ANMB地区)」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会)